

河川の活動と都市の形成が相互に与えた影響 に関する史的研究

水田, 恒樹 / MIZUTA, Tsuneki

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

148

(発行年 / Year)

2014-03-24

(学位授与番号 / Degree Number)

32675甲第334号

(学位授与年月日 / Date of Granted)

2014-03-24

(学位名 / Degree Name)

博士(工学)

(学位授与機関 / Degree Grantor)

法政大学 (Hosei University)

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00010254>

博士学位論文
論文内容の要旨および審査結果の要旨

氏名	水田 恒樹
学位の種類	博士（工学）
学位記番号	第 549 号
学位授与の日付	2014 年 3 月 24 日
学位授与の要件	本学学位規則第 5 条第 1 項(1)該当者(甲)
論文審査委員	主査 教授 陣内 秀信 副査 教授 出口 清孝 副査 教授 宮下 清栄 副査 熊本大学准教授 田中 尚人

河川の活動と都市の形成が相互に与えた影響に関する史的研究

1. 論文内容の要旨

本研究は河川の活動と都市空間の形成が相互に与えた影響を、通史的に究明することを目的とする。事例調査によって双方に関わる事象を、戦国期から現代にわたって記述し、複数の事例を横断的に考察して、相互の影響に関する普遍的な現象を抽出している。

第1章は序論として、研究の背景、既往研究、目的、方法を明らかにした。本研究の仮説的な枠組みとして、河畔の都市は沖積平野の河成地形、すなわち扇状地、蛇行帯、三角州によって類型化できるものとし、それぞれに事例都市を配している。

第2章では扇状地に立地する都市の事例として、常願寺川扇状地の端部に位置し、神通川の蛇行部にも接する城下町、富山町を扱った。近世から頻発する両河の洪水に苦しみ、近代になって数々の河川改修事業によって水害都市の汚名を返上した。神通川の廃川地埋め立て、富岩運河の開削は市街地の姿を大きく変え、近代工業都市としての出発点となる。

第3章では蛇行帯に立地する都市の事例として、揖斐川とその旧流路である杭瀬川に挟まれた輪中内の城下町、大垣町を取り上げた。木曽三川の洪水が集まりやすく、低平な地形を背景に、大垣町は破堤や湛水に悩まされる一方、近世には豊かな湧水を集める水門川の水運、近代には豊富で良質の地下水を利用した繊維産業で繁栄する。

第4章では三角州に立地する都市の事例として、信濃川河口の新潟町を扱った。砂洲上に築かれたこの日本海岸の重要港は、新たな砂洲の形成や阿賀野川河口の東遷などに翻弄された。近世には稀だった水害が、近代には上流の治水事業によって頻発し、大河津分水の開通まで続く。戦後には地盤の沈下、液状化、海岸侵食などを経験した。

第5章では事例3都市を横断的にみて、戦国末期から近世における水害と治水、水運と川港の変容、河畔の土地利用、水路の開削と機能、水辺の景観の5点から都市と河川の関係性を考察するとともに、近世の治水技術、河川に関わる社会環境を論じた。

第6章では同じ要領で近代を中心に戦後までを考察し、河川の近代化の結果としての画

一化、「河道主義」治水の矛盾、液状化や海岸浸食などの災害、河川への無関心や地域の水防の弱体化に言及しつつ、環境としての河川、運河や水路の再生と保存などにも触れた。

第7章は結論であり、第5、6章の考察を総括し、都市と河川の関係性を河成地形間、近世と近代で対比した。要約すれば、近世の河畔都市は河川に適応、依存し、水害を受容したために、河成地形による都市空間の違いが顕著だったのに対し、近代の河畔都市は河川を改変、陸化し、水害を制御したため、河成地形による違いは克服され、小さくなった。

2. 審査結果の要旨

本論文は河川を軸とする3都市の形成史の記述と、都市と河川に関する河成地形別、時代別の論考からなり、前段で論じられた事象を後段で横断的に考察している。研究方法は都市を沖積平野の河成地形によって3分類し、扇状地では富山城下と神通川、蛇行帯では大垣城下と揖斐川、三角州では港町新潟と信濃川を研究対象とし、各都市を治水、水運、土地利用、水路、景観の共通5課題から分析した。論理的で堅固な枠組みを持ち、都市史研究と土木史研究を架橋して新たな研究領域をつくるという野心的な試みであり、次のような優れた成果が認められる。

1. 近世都市の重要な水系基盤、空間要素である川港について、扇状地では山間の街道、蛇行帯では幹線街道、三角州では海運へと中継する機能を有し、下流ほど物流量や港の規模が大きいと類型間の差異を明らかにしている。同じく水路についても、扇状地では外水排除、三角州では航路の機能が卓越し、蛇行帯では双方を兼ねて、三地形に共通するのは内水排除の機能であることを指摘し、河成地形による類型化の有効性を確認した。

2. さらに、富山では水害のパターン分析から水路システムが治水機能を有すること、大垣では近代運河の開削と転用の経緯の解明から背景に工業用排水路のニーズがあったこと、新潟では旧市街の復元から砂洲や砂丘の形成に合わせて港を移動してきたことなどを明らかにし、都市と河川の複雑、多様な関係の一端を示した。

3. 近世都市の多様な水系、豊かな水景は各方面から研究されてきたが、本論文は神通川の蛇行部に立地したため水害に苦しんだ富山、信濃川の堆積の進行に伴って移転、拡張、掘割の延長などを繰り返し、港を維持した新潟という劇的な事例、厳しい側面を取り上げ、社会史への傾斜を強める都市研究に、自然史的接近の大きな可能性を提示した。

4. 神通川、揖斐川、信濃川というわが国屈指の大河川だけでなく、古い川港があり常願寺川の洪水を城下に導く富山の鼬川、水運路、輪中内の排水路、城濠だった大垣の水門川、信濃川との離合によって新潟港の盛衰を左右した阿賀野川などを取り上げ、第二の河川が都市形成に与える副次的な影響という、重要な論点を提起した。

5. 多くの近世城下町において武士が山手、町人が下町に住んだことはよく知られるが、本論文は商品経済の発達に伴い、後者が水利や水運の利便を求め、水害のリスクを冒して河岸低地で発展、拡大し続けた様子を具体的に記述している。下町の姿は上記の川港や水路の違いを反映して多様であり、河川に依存、適合し、水害を受容した近世都市と、河川を改変、陸化し、水害を制御しつつ個性が希薄化した近代都市が鮮やかに対比されている。

学際的な指向性を持ち、各分野の多数の文献を精力的に渉猟した本論文は、専門分化、精緻化が進む都市史研究に一石を投じたと言える。よって、本審査小委員会は全会一致をもって提出論文が博士（工学）の学位に値するという結論に達した。